

新型コロナウイルス感染症による長期休校中の 児童・生徒の家庭での過ごし方に関する調査

高崎 文子*

Survey on How Students Spent Time Off School During the COVID-19 Pandemic School Closure

Fumiko TAKASAKI

Abstract

Due to the COVID-19 pandemic, schools were forced to close nationwide. In addition, elementary and junior high school students could not freely go outside their homes and had to study at home. This situation is assumed to have negative influence on their motivation to learn and mental health.

The purpose of this study was to investigate regarding how students managed to study at home, how they responded to online classes and how they coped with the stressful lifestyle during the 3-month period they were off school. 782 elementary school students and 370 junior high school students participated in this survey.

The results was showed that both elementary and junior high school students were given online lessons in May 2020, either monodirectional or interactive, every day. Most of the students worked every day over homework given by schools, elementary school pupils for over two hours and junior high students for over three hours. Besides doing the homework, many children spent time watching TV or YouTube or doing other enjoyable things including hobbies. In general, few stress symptoms were seen, but an indication that exercising reduces stress and playing games and SNS online increases stress was gained from the survey results.

Key words : the COVID-19 pandemic, online lesson, motivation to learn, mental health

問題と目的

新型コロナウイルス感染症の流行を受けて、2020年2月28日小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対して一斉臨時休業の通達が出され（文部科学省, 2020a）、全国の学校で3月2日から春季休業前まで休校措置がとられた。その後も感染症の拡大による緊急事態宣言の発出、対象地域拡大と期間延長のため、多くの自治体では5月末まで休校措置が継続された。新年度の4月1日以降の休校期間が30日以内だったのは小中学校で約63%、特別支援学校で42%、31日以上だったのは小中学校で約36%、特別支援学校で56%であった（文部科学省, 2020b）。

この間、子どもたちは自宅学習を行うこととなり、

学校現場は児童・生徒の学びをどのように保障していくのか対応に迫られた。様々な議論や試行錯誤の中、家庭での学習を効果的に進める方法として注目されたのは、ICTを積極的に活用したオンライン授業であった。折しも文部科学省は2019年末に「GIGAスクール構想」を打ち出し、学校のICT環境の整備に乗り出したところであった。しかし、2020年3月時点で、学習者用PCの導入数は全国平均で児童生徒5.4人に1台程度だったということもあり、急な休校措置に直面しオンライン授業を実施できたのは一部の学校であった。文部科学省の調査によると（文部科学省, 2020b）、双方向型のオンライン授業を実施したのは6月の調査では全体の15%（4月時点では5%）、授業動画の配信の実施が26%（4月時点では10%）、デジタル教科書やデジタル教材を活用したのは40%（4月時点では29%）であり、

* 熊本大学大学院人文社会科学部

紙ベースの教科書やプリント教材を使った学習だけだった学校も多数あったことがわかる。

そのような全国的な状況の中、熊本市では全国に先駆けオンライン授業を開始し（朝日新聞, 2020a）、4月中には様々な対応をした上で、全小中学校を対象に実施体制を整えることができた。一方全国的には、各家庭のオンライン環境が異なることを理由に、オンライン授業の導入に踏み切れない自治体や学校もあった。オンライン授業が実施できたかどうかで、学習の進み方の地域間格差や学校間格差が生じることが心配され、ICT環境整備の遅れやオンライン授業対応への遅れは大きな問題となった（朝日新聞, 2020b）。

以上のように長期休校中の学習のありかたについては、オンライン授業を実施することに関心が集まったが、オンライン授業を受けることによる影響については議論されなかった。オンライン授業の導入は学習の量的な側面への対応としては有効な方法だったが、通常の学習と同じように効果が期待できるのかといった学習の質的な側面については、慎重に検証していくべきだと思われる。コロナ禍という異常事態の中で、子どもたちはそれまでの日常とは全く異なる学習環境に置かれ、心理的にもかなりの負荷がかかったものと思われる。外出の制限、友だちと会えない状況、画面越しの授業、一人で取り組む課題など、通常の学びの環境とは異なる要因がいくつも重なっており、それぞれがどのような影響をもたらしたのか、調査し分析を行っていく必要があるだろう。

そこで本研究では、3か月の休校中に子どもたちが家庭でどのように過ごしたのか、オンライン授業をどのように受けたのか、また休校期間中のストレス反応について調査し、通常とは異なる学習環境のどの要因が児童・生徒の学習への取り組みやメンタルヘルスに影響を与えたかについて分析することを目的とした。

方法

調査協力者：熊本市内の小学校2校（A小学校、B小学校）に在籍する児童782名、中学校1校（C中学校）に在籍する生徒370名の計1152名（Table 1）。
調査内容：「学校がお休みの間の家でのご過ごし方についてのアンケート」を作成した。調査票作成にあたっては調査協力校の校長・教諭に項目内容や調査方法について確認してもらった。また、学年に合わせて漢字にはふりがなをふるなどの配慮を行った。

調査票の構成は以下のとおりであった。

Table 1 調査協力者 (人)

		小1	小2	小3	小4	小5	小6	計	
A小学校	女児	51	52	51	53	49	55	620	
	男児	52	52	50	53	49	53		
B小学校	女児	—	—	16	13	17	23	162	
	男児	—	—	22	31	16	18		
	回答しない	—	—	1	2	3	0		
小学校合計		103	104	140	152	134	149	782	
		中1	中2	中3					
C中学校	女性	74	62	60					
	男性	55	59	59					
	回答しない	0	0	1					
中学校合計		129	121	120	370				

*A小学校は性別欄に「回答しない」の選択肢を設けなかった

*B小学校は3年生から6年生が調査に参加した

- 1) 基本属性
- 2) 先生や友だちとの接触機会 4項目（対象はB小学校とC中学校のみ）
- 3) オンライン授業への参加頻度 4項目
- 4) 自宅学習時間 4項目
- 5) 勉強以外の活動頻度 8項目
- 6) オンライン授業への参加ツール
- 7) オンライン授業参加の際の家族の支援（A、B小学校のみ）
- 8) オンライン授業の感想（中学生10項目、小学生7項目）
- 9) 学習方略（中学生23項目、小学生12項目）
- 10) 学習意欲（中学生20項目、小学生10項目）
- 11) ストレス反応（中学生21項目、小学生10項目）

回答方法については、設問2), 3), 5)は「全くなかった」「週に1回くらい」「週に2, 3回くらい」「毎日」の中から回答を選択、設問4)は「全くしなかった」「30分程度」「1時間程度」「2時間程度」「3時間以上（中学生のみ）」の中から選択させた。設問8), 10), 11)は「1全く当てはまらない～4よく当てはまる」までの4段階、設問9)は「1全くしなかった～4よくした」までの4段階のリッカート法で回答させた。

なお本報告では、調査項目のうち9)学習方略と10)学習意欲に関しては分析に含めない。

手続き：小学校の児童を対象とした調査は学校を通じて調査票を配布し、中学校の生徒を対象とした調査はWeb調査を行った。

A小学校は長期休校明けの6月1日～26日の間に調査を実施した。児童は調査票を家庭に持ち帰り記入後に担任教諭が回収した。このため、低学年の児童は家庭で保護者と一緒に回答を記入したと想定される。3年生の1クラスのみクラスで一斉に調査が

実施された。全児童数に対する回答率は92.9%であった。

B 小学校は休校明けの6月3日～5日の間に、クラスごとに調査を実施した。担任教諭が調査項目を読み上げ児童がその場で回答を記入し、その後担任教諭が調査票を回収した。全児童数に対する回答率は94.1%であった。

C 中学校は、休校中の5月22日から休校明けの6月5日の間、インターネット上の調査フォームへ回答する方式で調査が実施された。中学校のホームページを通じて調査への参加の呼びかけと調査票のURLが周知され、生徒は各自自宅で回答した。全生徒数に対する回答率は77.0%であった。

調査実施にあたり、参加は任意であり、回答について個人の特定はされず（無記名）、プライバシーが守られること、学校の成績には影響しないことを文章で説明した。教示として、学校が休みだった5月の気持ちを振り返って回答するように求めた。

結 果

先生や友だちとの接触機会

休校中に学校の先生や友達とどれくらい接触する機会があったかについて、「先生とオンラインで会った頻度」「友だちとオンラインで会った頻度」「登校時に友だちと会った頻度」「学校以外で友だちと会った頻度」の4項目への回答を求めた。

集計の結果（Table 2）、中学生は毎日オンライン上で先生（96%）や友だち（78%）と会う機会があったことがわかった。一方小学生は先生とはオンライン上で週に2, 3回（39%）から毎日（31%）という回答が多かったが、友だちとはオンライン上では毎日（9%）という回答は少なかった。また小学生は休校中も学校の敷地内の学童クラブに参加する子どもたちがいたため、友だちと登校時に毎日会った（40%）という回答も多かった。小学生・中学生ともに学校以外では友だちと全く会わなかったという回答が多く（それぞれ64%・79%）、休校中は外出すること、外で友だちと遊ぶことが制限されていた状況がうかがえた。なお、A 小学校の調査票にはこの設問を設けなかったため、回答はB 小学校とC 中学校のものである。

オンライン授業への参加頻度

休校中にオンライン授業にどれくらい参加する機会があったかについて「学校の双方向型のオンライン授業に参加した頻度」「学校の一方向型のオンライン授業に参加した頻度」「テレビ番組やインターネットの動画の授業を見た頻度」「塾や通信教育のオンライン授業に参加した頻度」の4項目への回答を求めた。

集計の結果（Table 3）、中学生は毎日双方向型のオンライン授業に参加（99%）しており、一方向型のオンライン授業は全く参加しなかった（43%）が、毎日参加した（53%）の両極に分かれた。小学

Table 2 先生や友だちとの接触機会 (人)

		全くなし	週に1回	週に2,3回	毎日	計
先生と オンラインで	小学校*1	10 (6%)	38 (23%)	63 (39%)	51 (31%)	162
	中学校	9 (2%)	2 (1%)	4 (1%)	355 (96%)	370
友だちと オンラインで	小学校*1	32 (20%)	58 (36%)	58 (36%)	14 (9%)	162
	中学校	48 (13%)	14 (4%)	18 (5%)	290 (78%)	370
友だちと 登校時	小学校*1	28 (20%)	47 (34%)	8 (6%)	56 (40%)	139
	中学校	287 (78%)	27 (7%)	3 (1%)	53 (14%)	370
友だちと 学校以外	小学校*1	104 (64%)	25 (15%)	25 (15%)	8 (5%)	162
	中学校	292 (79%)	45 (12%)	27 (7%)	6 (2%)	370

*1 小学校の調査対象はB小学校のみ

Table 3 オンライン授業への参加頻度 (人)

		全くなし	週に1回 程度	週に2,3回 程度	毎日	計
学校の双方向 型授業	小学校*1	15 (13%)	17 (14%)	25 (21%)	63 (53%)	120
	中学校	1 (0%)	0 (0%)	1 (0%)	368 (99%)	370
学校の一方向 型授業	小学校	105 (14%)	21 (3%)	32 (4%)	581 (79%)	739
	中学校	160 (43%)	7 (2%)	6 (2%)	195 (53%)	368
テレビ・動画 番組	小学校	297 (40%)	169 (23%)	155 (21%)	118 (16%)	739
	中学校	172 (48%)	10 (3%)	33 (9%)	142 (40%)	357
塾・通信教育の オンライン授業	小学校	319 (43%)	87 (12%)	193 (26%)	136 (19%)	735
	中学校	30 (8%)	8 (2%)	193 (53%)	134 (37%)	365

*1 双方向型授業のオンライン授業の調査対象はB小学校のみ

生は毎日一方向型のオンライン授業に参加した(79%)という回答が最も多かった。A小学校では双方向型の授業が全く実施されなかったため設問自体を設けなかったが、かわりに一方向型のオンライン授業が毎日行われており、それがこの回答に反映されたものと思われる。なお、熊本市教育委員会とテレビ局が共同で教育番組を制作し放送を行っており、多くの児童がテレビや動画を週に1回以上(週1回から毎日の合計は60%)は視聴していたことがわかった。塾や通信教育のオンライン授業は、小学生では参加しなかった(43%)という回答が多かったが、中学生では週に2,3回(53%)から毎日(37%)参加したという回答が多かった。学校がオンライン授業を提供する努力をしたのと同じく、塾や通信教育の事業者もコロナ禍で対面授業ができなかった間、オンライン授業の提供を行っていたことがわかった。

自宅学習時間

休校中に毎日どれくらい学習に取り組んだかについて「学校の課題」「塾の課題」「通信教育の課題」「やりたかった学習」の4項目への回答を求めた。

集計の結果 (Table 4)、学校の課題については、中学生の86%が3時間以上取り組んでおり、小学生の63%が2時間程度取り組んでいることがわかった(小学生は最大の選択肢が2時間までの設定だった)。塾の課題については中学生は2時間から3時間以上取り組んだという回答が多く(27%と37%)、小学生では全くしなかった(36%)と2時間(25%)に分かれる結果となった。小学生は学年によって塾に通っている割合が異なるためだと思われる。通信教育の課題は小学生・中学生ともに全くしなかった(62%・64%)という回答が多かった。また、各自がやりたかった学習に取り組んだ時間については小学生・中学生ともに30分(40%・31%)が最も多く、一方的に課された課題以外にも毎日短時間でも内発的な学習に取り組んだことがわかった。

勉強以外の活動頻度

休校中に勉強以外の活動を行った頻度について「体を動かす」「テレビ・YouTubeを見る」「本・マンガを読む」「ゲームをする」「家の手伝いをする」「習い事をする」「好きなこと・趣味に取り組む」「SNSをする」の8項目への回答を求めた。

Table 4 自宅学習時間

		全くしなかった	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間以上 ^{*1}	(人)計
学校の課題	小学校	9 (1%)	85 (11%)	196 (25%)	491 (63%)	—	781
	中学校	3 (1%)	28 (8%)	59 (16%)	34 (9%)	246 (66%)	370
塾の課題	小学校	281 (36%)	136 (18%)	163 (21%)	197 (25%)	—	777
	中学校	34 (9%)	22 (6%)	78 (21%)	99 (27%)	137 (37%)	370
通信教育の課題	小学校	481 (62%)	141 (18%)	98 (13%)	54 (7%)	—	774
	中学校	237 (64%)	40 (11%)	40 (11%)	19 (5%)	34 (9%)	370
やりたかった学習	小学校	206 (26%)	310 (40%)	185 (24%)	78 (10%)	—	779
	中学校	69 (19%)	114 (31%)	103 (28%)	49 (13%)	35 (9%)	370

*1 小学校は3時間以上という選択肢を設けなかった

Table 5 勉強以外の活動頻度

		全くしない	週に1回	週に2,3回	毎日	(人)計
体を動かす	小学校	28 (4%)	104 (13%)	294 (38%)	356 (46%)	782
	中学校	94 (25%)	53 (14%)	108 (29%)	115 (31%)	370
テレビ・YouTube	小学校	34 (4%)	63 (8%)	128 (16%)	557 (71%)	782
	中学校	6 (2%)	15 (4%)	48 (13%)	301 (81%)	370
本・マンガ	小学校	76 (10%)	109 (14%)	179 (23%)	418 (53%)	782
	中学校	88 (24%)	39 (11%)	71 (19%)	172 (46%)	370
ゲーム	小学校	261 (33%)	90 (12%)	138 (18%)	291 (37%)	780
	中学校	132 (36%)	23 (6%)	59 (16%)	156 (42%)	370
手伝い	小学校	42 (5%)	122 (16%)	247 (32%)	370 (47%)	781
	中学校	55 (15%)	56 (15%)	97 (26%)	162 (44%)	370
習い事	小学校	222 (29%)	171 (22%)	256 (33%)	129 (17%)	778
	中学校	140 (38%)	44 (12%)	153 (41%)	33 (9%)	370
好きなこと・趣味	小学校	99 (13%)	110 (14%)	177 (23%)	395 (51%)	781
	中学校	38 (10%)	35 (9%)	60 (16%)	237 (64%)	370
SNS	小学校	713 (91%)	18 (2%)	24 (3%)	26 (3%)	781
	中学校	175 (47%)	8 (2%)	45 (12%)	142 (38%)	370

集計の結果 (Table 5), 体を動かすは小学生も中学生も週に2, 3回 (38%・29%) から毎日 (46%・31%) と多くの児童・生徒が取り組んでいたことがわかった。テレビ・YouTube は小中学生ともに毎日 (71%・81%) 視聴したという回答が多く, 本・マンガも小中学生ともに毎日 (53%・46%) という回答が半数前後と多かった。一方, ゲームは小中学生ともに, 全くしなかった (33%・36%) か毎日 (37%・42%) の両極に分かれる結果であった。また, SNS は小学生では全くしなかったが91%であったが, 中学生は全くしなかった (47%) か毎日 (38%) の両極に分かれる結果だった。

オンライン授業参加に使ったデバイス

自宅でオンライン授業を受ける時に使ったデバイスについて, 「パソコン」「タブレット」「スマートフォン」から選択させた。小学生は複数回答が可能であり, 中学生の回答は1つだけ選択できた。

集計の結果 (Table 6), 小学生はタブレットが70%と最も多く, 中学生はタブレット (51%) パソコン (39%) の順で多かった。小中学校ともに通常の授業でタブレットを使用しており, 自宅にデジタル環境がない場合は休校中に学校のタブレットを貸し出すという対応がとられたため, タブレットを使用した児童・生徒が多かったものと考えられる。

オンライン授業参加の際の家族の支援

小学生を対象に, 自宅でオンライン授業を受けた際の家族の支援についてたずね, 「家の人に手伝ってもらいながら授業に参加した」「最初は家の人といっしょで, だんだんひとりで授業に参加した」「ひとりだけで授業に参加した」から回答を選択させた。

集計の結果 (Table 7), 小学校1, 2年生では家族に手伝ってもらいながら (40%, 41%) か, 最初は手伝ってもらった (59%, 43%) という回答が多かった。3, 4年生になると家の人にずっと手伝わ

てもらった児童は減り, 最初は手伝ってもらったがだんだんひとりで参加 (45%, 55%) という回答が多くなった。5, 6年生になると最初からひとりだけで授業に参加した児童も多くなった (43%, 58%)。

オンライン授業の感想

学校のオンライン授業を受けてどのように感じたかについて, 中学生10項目, 小学生7項目に対して回答を求めた。このうち小・中学校共通の7項目について, 小学校低学年・小学校高学年・中学生の発達段階別に平均値を算出した (Figure 1)。

各項目得点について発達段階差の検定のため分散分析を行った。その結果, 「楽しかった」 ($F(2,1146) = 23.53, p < .001$), 「やる気になった」 ($F(2,1145) = 93.26, p < .001$), 「わかりやすかった」 ($F(2,1142) = 29.86, p < .001$), 「緊張した」 ($F(2,1145) = 14.50, p < .001$), 「質問しにくかった」 ($F(2,1142) = 7.90, p < .001$), 「あきてしまった」 ($F(2,1145) = 4.50, p < .001$) の6項目については, 有意差が認められた。「集中できなかった」のみ発達段階による得点差は

Table 6 オンライン授業で使ったツール (人)

	パソコン	タブレット	スマホ	複数 組み合わせ	計
小学校	61 (9%)	504 (70%)	29 (4%)	123 (17%)	717
中学校*1	146 (39%)	187 (51%)	37 (10%)	—	370

*1 中学校の調査では, 複数回答は設定しなかった

Table 7 オンライン授業参加の際の家族の支援 (人)

	家の人と	最初は家の人と, だんだんひとり	ひとりだけで	計
小1	40 (40%)	60 (59%)	1 (1%)	101
小2	38 (41%)	40 (43%)	15 (16%)	93
小3	39 (29%)	60 (45%)	35 (26%)	134
小4	18 (15%)	67 (55%)	36 (30%)	121
小5	14 (11%)	57 (46%)	53 (43%)	124
小6	11 (9%)	42 (33%)	73 (58%)	126
計	160 (23%)	326 (47%)	213 (30%)	699

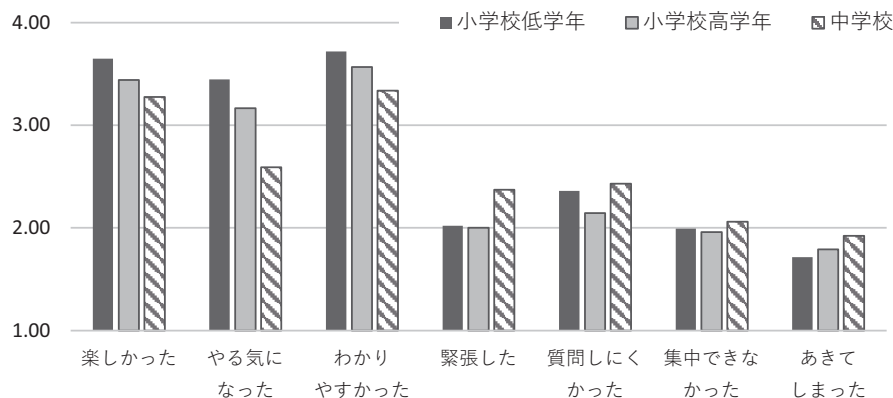


Figure 1 オンライン授業を受けた感想

認められなかった ($F(2,1144)=1.11, n.s.$)。下位検定の結果、「楽しかった」「やる気になった」「わかりやすかった」のポジティブな感想については、小学校低学年が最も高く、次に小学校高学年、中学生と得点が低くなっていた。「緊張した」「あきてしまった」の項目得点は、中学生が小学生より得点が高かった。「質問しにくかった」の項目は、小学校高学年が小学校低学年と中学生よりも得点が低かった。

休校中のストレス反応

休校中のストレス反応について、中学生21項目、小学生10項目に対して回答を求めた。このうち小・中学生共通の10項目について、小学校低学年・小学校高学年・中学生の発達段階別に平均値を算出した (Figure 2)。

各項目得点について発達段階差の検定のため分散分析を行った。分析の結果、「頭がくらくらした」($F(2,1146)=25.05, p<.001$)、「お腹がいたくなった」($F(2,1147)=6.74, p<.001$)、「体がだるかった」($F(2,1145)=32.58, p<.001$)、「気持ち悪かった」($F(2,1147)=12.78, p<.001$)、「悲しかった」($F(2,1147)=3.55, p<.001$)、「イライラした」($F(2,1147)=14.74, p<.001$)、「あまり頑張れなかった」($F(2,1146)=10.19, p<.001$)、「集中できないかんじだった」($F(2,1146)=6.59, p<.001$)、「なんにもやる気がしなかった」($F(2,1147)=9.94, p<.001$)の9項目については、有意差が認められた。「なんとなく、心配だった」のみ発達段階による得点差は認められなかった ($F(2,1146)=2.83, n.s.$)。下位検定の結果、「頭がくらくら」「体がだるい」「気持ち悪い」の項目得点は、小学校低学年が一番低く、次に高学年、中学生と得点が高くなった。「悲しかった」は小学校高学年が低学年よりも有意に高かった。「お腹がいたい」「イライラした」「集中できなかった」は、小学校高学年が、低学年と中学生よりも高かった。「やる気がしない」は小学校高学年と中学

生が小学校低学年よりも高かった。

各項目得点の平均はおおむね2点以下であり、全般的にはストレス反応は低かったが、身体的反応については発達段階が上がるほどストレス反応が高くなり、意欲に関する反応については小学校高学年でストレス反応が高かったことがわかった。

ストレスが高い児童・生徒の特徴

休校中のストレス反応が高い児童・生徒の特徴について分析するため、ストレス尺度の10項目の合計をストレス反応得点とし、上位25%をストレス高群、それ以下をストレス低群に分けた。ストレス反応得点の得点範囲の10-40点中、小学生では21点以上がストレス高群 (213名)、20点以下はストレス低群 (561名) となった。中学生では22点以上がストレス高群 (100名)、21点以下はストレス低群 (270名) となった。

学校種別に、ストレスの高さと先生や友だちとの接触機会、オンライン授業への参加頻度、自宅学習時間、勉強以外の活動頻度の各項目の関連を調べるため、カイ二乗検定を行った。

その結果、「先生や友だちとの接触機会」については、全4項目ともストレスの高さとの関連は認められなかった。「オンライン授業の参加頻度」については、学校の双方向のオンライン授業の頻度、テレビ番組やインターネットの動画の授業を見た頻度、塾や通信教育のオンライン授業に参加した頻度はストレスを高める要因とはなっておらず、学校の一方のオンライン授業の頻度のみがストレスとの有意な関連を示した (小学生 $\chi^2(3)=52.88, p<.001$; 中学生 $\chi^2(3)=15.16, p<.001$)。残差分析の結果、小学生では一方のオンライン授業を毎日受けたと回答した子どもに低ストレスが多く、全く受けなかったと回答した子どもに高ストレスが多かった。また中学生では一方の授業を週に2、3日受けた生徒に高ストレスが多かった (Table 8)。

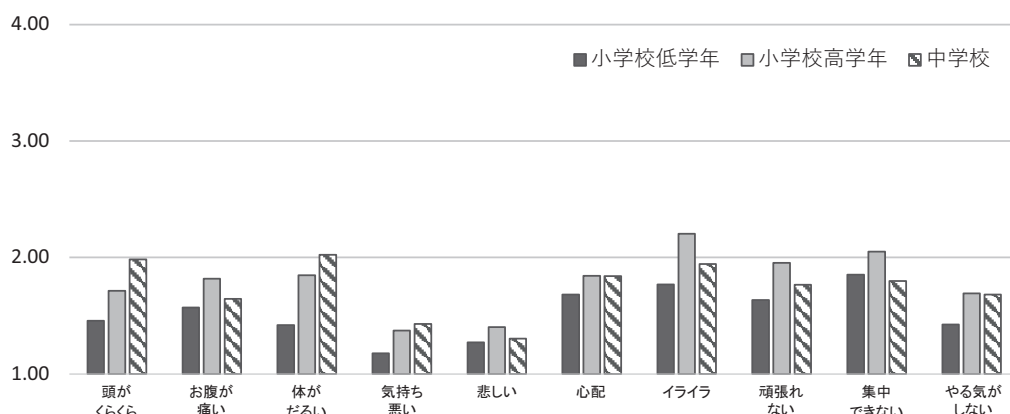


Figure 2 ストレス反応

「自宅学習時間」については、小学生のみ学校の課題 ($\chi^2(3)=30.50, p<.001$) と塾の課題 ($\chi^2(3)=9.71, p<.05$) に取り組んだ時間とストレスとの関連が示された。残差分析の結果、学校の課題の2時間の取り組みは低ストレスと、30分の取り組みは高ストレスと関連を示し、塾の課題の1時間の取り組みは低ストレスと、全くしなかったことは高ストレスと関連を示した (Table 9)。

「勉強以外の活動」については、小学生では体を動かす ($\chi^2(3)=18.02, p<.001$)、本・マンガを読む ($\chi^2(3)=19.27, p<.001$)、ゲームをする ($\chi^2(3)$

$=12.75, p<.01$)、SNS をする ($\chi^2(3)=10.13, p<.05$) がストレスとの有意な関連を示し、中学生では体を動かす ($\chi^2(3)=9.75, p<.05$)、SNS をする ($\chi^2(3)=8.75, p<.05$) がストレスとの関連を示した。残差分析の結果、小学生は毎日体を動かすこと、毎日本やマンガを読むことは低ストレスと、毎日ゲームをすることは高ストレスと関連がみられた (Table 10)。中学生では全く体を動かさないこと、SNS を毎日することと高ストレスとの関連がみられた (Table 11)。

Table 8 学校の一方型授業とストレスの関連 (人)

	毎日	週2,3回	週1回	全くなし	計	
小学校	低ストレス	458 (85%)	13 (2%)	15 (3%)	54 (10%)	540
	高ストレス	117 (61%)	19 (10%)	6 (3%)	49 (26%)	191
	計	575 (79%)	32 (4%)	21 (3%)	103 (14%)	731
中学校	低ストレス	137 (51%)	1 (0%)	7 (3%)	125 (46%)	270
	高ストレス	58 (58%)	5 (5%)	0 (0%)	37 (37%)	100
	計	195 (53%)	6 (2%)	7 (2%)	162 (44%)	370

Table 9 自宅学習時間とストレスの関連(小学生) (人)

	全くしなかった	30分	1時間	2時間(以上)	計	
学校の課題	低ストレス	5 (1%)	45 (8%)	127 (23%)	382 (68%)	559
	高ストレス	4 (2%)	40 (19%)	65 (31%)	104 (49%)	213
	計	9 (1%)	85 (11%)	192 (25%)	486 (63%)	772
塾の課題	低ストレス	187 (34%)	97 (17%)	132 (24%)	141 (25%)	557
	高ストレス	89 (42%)	38 (18%)	30 (14%)	54 (26%)	211
	計	276 (36%)	135 (18%)	162 (21%)	195 (25%)	768

Table 10 勉強以外の活動とストレスの関連 (小学生) (人)

	毎日	週2,3回	週1回	全くなし	計	
体を動かす	低ストレス	278 (50%)	197 (35%)	72 (13%)	13 (2%)	560
	高ストレス	77 (36%)	90 (42%)	31 (15%)	15 (7%)	213
	合計	355 (46%)	287 (37%)	103 (13%)	28 (4%)	773
本・マンガを読む	低ストレス	320 (57%)	125 (22%)	62 (11%)	53 (9%)	560
	高ストレス	92 (43%)	52 (24%)	47 (22%)	22 (10%)	213
	合計	412 (53%)	177 (23%)	109 (14%)	75 (10%)	773
ゲームをする	低ストレス	191 (34%)	95 (17%)	71 (13%)	202 (36%)	559
	高ストレス	97 (46%)	41 (19%)	18 (8%)	56 (26%)	212
	合計	288 (37%)	136 (18%)	89 (12%)	258 (33%)	771
SNSをする	低ストレス	12 (2%)	14 (3%)	12 (2%)	522 (93%)	560
	高ストレス	13 (6%)	9 (4%)	6 (3%)	184 (87%)	212
	計	25 (3%)	23 (3%)	18 (2%)	706 (91%)	772

Table 11 勉強以外の活動とストレスの関連 (中学生) (人)

	毎日	週2,3回	週1回	全くなし	計	
体を動かす	低ストレス	90 (33%)	85 (31%)	37 (14%)	58 (21%)	270
	高ストレス	25 (25%)	23 (23%)	16 (16%)	36 (36%)	100
	計	115 (31%)	108 (29%)	53 (14%)	94 (25%)	370
SNSをする	低ストレス	92 (34%)	33 (12%)	7 (3%)	138 (51%)	270
	高ストレス	50 (50%)	12 (12%)	1 (1%)	37 (37%)	100
	計	142 (38%)	45 (12%)	8 (2%)	175 (47%)	370

考 察

本研究では、新型コロナウイルス感染症による休校措置により、3か月もの間学校で先生や友だちと一緒に学ぶことができなかつた子どもたちが、家庭でどのように過ごしていたのか、その影響について分析することを目的とした。

まず、休校中の5月時点で先生や友達との接触機会がどの程度あったかについては、中学校ではオンラインではほぼ毎日接触があり、小学校では7割が先生とは週に2、3回以上（毎日も含む）の接触機会が持っていた。また、オンライン授業の参加頻度については、中学校では双方向型のオンライン授業を毎日、小学生では約8割が一方向型のオンライン授業を毎日受けていたことがわかった。調査対象となった小・中学校は、4月にはオンラインで子どもたちとやり取りをする環境を整え、5月時点では中学校では双方向のオンライン授業を毎日実施、小学校では朝の健康観察は双方向のオンラインで、授業については動画を配信する一方向のオンライン授業が実施された。これは全国的にはかなり先進的な対応であった。

子どもたちの家庭での学習時間については、小学生では2時間以上、中学生では3時間以上学校の課題に取り組んだ子どもが多かったが、これはオンラインで子どもたちとつながることが、生活のリズムの維持や課題に取り組む意欲に対する有効な支援となっていたためと考えられる。

オンライン授業への感想については、全般的に肯定的な項目（楽しかった・やる気になった・わかりやすかった）への反応が高く、否定的な項目（緊張した・質問しにくかった・集中できなかった・あきてしまった）への反応は低かったことから、子どもたちのオンライン授業への適応はよかったことがわかった。

長期の休校中の学習指導の方法としては、プリントなどの紙の教材の配布やテレビや動画教材の利用も行われたが（文部科学省、2020b）、学校の先生と子どもたちが毎日オンラインでやり取りができたということは、学習の進度を遅らせないということ以上に、学習習慣や学習意欲の維持という面において有効であったと考えられる。

オンライン授業を受けるにあたっての家庭の環境については、小・中学生ともにタブレットを使用した子どもが最も多かった。全国的には家庭のオンライン環境がそろわないと不公平になるため、オンライン授業に踏み切れなかつた学校も少なくなかつたが、今回の調査対象校は、家庭のオンライン環境が

ない場合は、学校のタブレットを貸し出すという対応をとっていた。また、4月の年度初めに登校日を設け、タブレットの使い方について指導を行った。これによって、オンライン環境というハード面においては一定の配慮がなされ、オンラインを有効に用いることができたと考えられる。しかし、小学校の1、2年生はひとりでオンライン授業を受けるのは難しく、4～6割の子どもは慣れるまでは家の人の支援を受けており、約4割の子どもはずっと家の人と一緒に授業を受けていた。高学年になるにつれて、ひとりでオンライン授業を受けた児童は増えたが、小学校6年生でも6割以下であった。このことから、オンライン授業を実施する際の課題としては、児童・生徒ひとりに情報機器1台というハード面の環境整備が急がれるとともに、子どもが家でひとりで学習する可能性も念頭に、発達段階に合わせた教材開発が求められるといえるだろう。

勉強以外の活動への取り組みについては、小中学生とも、体を動かすこと、テレビ・YouTubeの視聴、本・マンガを読むこと、家の手伝いについては週2、3回以上（毎日も含む）行ったという回答がいずれも6割～7割以上あり、勉強以外にもそれぞれが多様な活動に取り組んだことがわかった。またゲームやSNSは毎日したか全くしなかつたに2極化しており、学習以外の時間をどのように過ごしたかによる影響を見ていく必要があるのではないと思われる。

子どもたちの休校中のストレス反応は全般的には低いことが示されたが、その中でもストレスが高い子どもの特徴として、小学生は学校の一方向型のオンライン授業が全くなく、学校の課題は30分から1時間取り組み、塾の課題は全くせず、身体を動かすことを全くせず、本やマンガを週1回読み、ゲームやSNSは毎日していたということがわかった。中学生は学校の一方向型のオンライン授業を週2、3回受け、体を動かすことを全くせず、毎日SNSをしていたことが特徴として明らかになった。

この家庭での過ごし方とストレス反応はあくまでも両者の関連を示したもので、オンライン授業の方法や頻度がストレスを高めたのか、コロナ禍や休校によって高ストレスになったために、学習に取り組む時間が少なかつたり毎日ゲームをしていたのかは判断できない。ただし、先生や友だちとの接触機会を作りながら学習を進めていくという配慮があれば、毎日のオンライン授業や、2時間以上の学校の課題などの学習の量的負荷が高ストレスに直結するわけではないことが示された。

また、ストレスコーピングとして、体を動かすこ

とが重要であることも明らかになった。一方でゲームや SNS で気分転換をしようとしてもストレスの解消にはならないことも示された。これらの活動のストレス緩和の影響は、長期休校中に限ったことではないと考えられるが、有効なストレスコーピングとして改めて確認されるべきであると考ええる。

本調査は、突然の長期休校という出来事に直面した子どもたちの、家庭での学習の取り組みとその影響について分析を行ったものであるが、このような特殊な事態が今後また生じるかどうかはわからない。しかし今後学びの場が多様化し、学校でも家庭でも同じように授業に参加できる環境が整えば、感染症対策のような特殊な状況でなくても、家でオンライン授業のみを受ける子どもが出てくる可能性もある。学校という学びの場の意義については今後さらに議論が深まると考えられるが、オンライン学習の有効性や配慮すべき点などを押さえた上での議論となるべきである。本調査結果はその検討のための有効な一助になるものと考えられる。

引用文献

- 朝日新聞（2020a）休校中の生徒らに遠隔授業（2020年3月12日付朝刊）
- 朝日新聞（2020b）紙のプリントで自習…オンライン授業との格差、大丈夫？（2020年4月29日付朝刊）
- 文部科学省（2020a）新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について（通知）
- 文部科学省（2020b）新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について（令和2年6月23日時点）

謝 辞

調査にご協力いただいた児童・生徒のみなさんに心より感謝申し上げます。またお忙しい中調査の実施にご尽力いただきました、川野智子先生、森每恵先生、河嶋里亜先生はじめ各校の先生方には、心より御礼申し上げます。